

## 令和5年度8020公募研究報告書抄録（採択番号23-4-10）

研究課題：オーラルフレイルと心不全の関連を解明する

研究者名：岸本裕充<sup>1)</sup>、上田美帆<sup>1)</sup>、江口明世<sup>2)</sup>

所属：1) 兵庫医科大学医学部歯科口腔外科学講座

2) 兵庫医科大学医学部医療マネジメント学

### （背景および目的）

オーラルフレイルとは、老化に伴う様々な口腔の状態の変化や、口腔健康への関心の低下、口腔の脆弱性が増加し、さらにはフレイルに影響を与える一連の現象や過程と定義され、「前フレイル期」の段階である。フレイルは、加齢による心機能低下や血管機能低下と関連し、心不全患者ではフレイルを合併すると生命予後不良となることが報告されている。

「前フレイル期」であるオーラルフレイルが心不全の予後不良因子となる可能性は高く、関連が解明されれば、より早期に対象患者へ介入を行うことで、心不全の予後改善に貢献できると考える。本研究の目的は、オーラルフレイルと心不全の関連を解明することである。

### （方法）

研究デザインは前向きコホート研究とし、当院入院中の慢性心不全患者の中で、オーラルフレイルが疑われる患者に対し、退院時、退院6か月後、12か月後にオーラルフレイル評価を行い、再入院・死亡の調査を行う。

オーラルフレイル評価は、口腔機能低下症の有無による客観的指標と、問診による主観的指標により点数化を行い評価した。客観的指標としては、口腔衛生状態として舌苔付着度（Tongue Coating Index; TCI）および口腔内細菌カウンをを用いた。口腔乾燥の評価には口腔水分計ムーカスを用い、舌口唇運動機能はオーラルディアドコキネシスにて評価した。残存歯数によって咬合力を評価し、舌圧は舌圧測定器を使用した。咀嚼機能はグルコセンサーを用いて評価した。嚥下機能の評価には聖隷式嚥下質問紙を用いた。

### （結果および考察）

本研究は前向きコホート研究であり、2024年3月末までにエントリーできた患者は、男性5名、女性2名の合計7名で、退院時評価のみ収集できた。平均年齢は80±8歳であった。TCI 45±25%、口腔内細菌数  $(1.58 \pm 0.4) \times 10^7$  個、口腔粘膜湿潤度 28.6±1、オーラルディアドコキネシス 4.6±2回/5秒、残存歯数 14.3±13本、舌圧 20.4±10.6 kPa、グルコース溶出量 130±69.5 mg/dL、聖隷式嚥下質問紙 17±13点であった。7名すべてが口腔機能低下症の診断に該当した。主観的指標では7名すべてが「1年に1回以上歯医者に行っていない」と答えており、適切な歯科介入ができていない可能性が示唆された。

ベースラインデータを得ることができたため、今後は対象患者を増やすとともに、退院6か月後および12か月後でのオーラルフレイル評価とともに、再入院・死亡の調査を継続していく予定である。